

5 節 聖書が神の言葉であると、私たちはどのようにして 確信するようになるか。

5-① わたしたちは、教会の証言によって、聖書に対する高く敬虔な評価へと心を動かされ、導かれることがある。

「神の家でどのように行動すべきかを、あなたがたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。」

㊦

テモテへの手紙 第一 3・15

※教会は、信仰を支える柱であり、土台である。(脚注)

※カルヴァンは、教会の権威を聖書の権威の上に置こうとした当時のカトリックの考えを批判しつつ、聖書の権威に導く教会の役割について、アウグスティヌスの言葉を引用して、次のように言う。

『信じないものは教会が同意しているという事実に促されない限りは、キリストに与る福音の確かさを少しも信じることができない……まだ見たことのないものを何よりも先ず信じるように招き、それによって我々の信仰がいよいよ強くされ、信じることを理解するようにさせるものに従うべきでないか。これは人間的手段によらず、神御自身によって我々の精神が内に固くせられ、また照らされるからである』(アウグスティヌス)。……つまり、聖書に対する我々の信仰は、教会の思うままの同意に依存しているのではないが、未だ神の御霊に照らされていない者は、教会への尊敬によって素直にされ、福音に

よってキリストを信じる信仰を学ぶことを受け入れるに至る。このようにして教会の権威が福音を信じる準備をさせる謂わば入門となるのだと言おうとしている。」(綱要) 1-7-3

「信仰告白は前のほう(※四節)で、聖書の権威が(いかなる人間や教会の証言にも依拠せず)と否定している。しかし、信仰告白は、われわれが(聖書に対する高く敬虔な評価)を持つように導くのに教会が影響力を持つことがあると、はっきり認める。一般的には、これは教会の説教と教えの働きを通して起きる。しかし教会をして聖書が神の言葉であると確信させる、聖書の権威の本当の根拠は何か。」(註解)これが次項に述べられている。

5-② 聖書の内容の天的性質、教理の有効性、文体の威厳、あらゆる部分の一致、全体の目標(すなわち、神にすべての栄光を帰すこと)、人間の救いの唯一の方法についてなしている完全な開示、その他多くの比類ない優れた点、およびその全き完全性は、聖書自身が神の御言葉であると豊かに立証する論拠である。しかしそれにもかかわらず、聖書の無謬の真理と神的権威に対するわたしたちの完全な納得と確信は、御言葉により、御言葉と共に、わたしたちの心の中で証しなされる聖霊の内的御業による。

「あなたがたは聖なる方から油を注がれているので、皆、真理を知っています。……しかし、いつもあなたがたの内には、御子から注がれた油がありますから、だれからも教えを受ける必要がありません。この油が万事について教えます。それは真実であって、偽りではありません。だから、教えられたとおり、御子の内にとどまりなさい。」 ⑥

ヨハネの手紙 一 2・20, 27

「その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。御霊はわたしたちの栄光を現します。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。」 ㊦

ヨハネの福音書 16・13, 14

※「地上でイエスが十分に語り尽せなかったことは、イエスが去られた後、真理の御霊がきて、すべてを明らかにしてくださる。御霊が示すのは新しい真理ではなく、イエスご自身が語られ、また行われたことに含まれる真理にほかならない。御霊は、神の救いの計画を示し、やがて起ころうとしていること、すなわち、目前に迫ったイエスの死と復活の出来事の永遠の意義を明らかにしてくださる。」(脚注)

カルヴァンはこの証拠聖句に関連して、御霊の働きについて次のように言う。

「ところで、主はいかなる霊を与えると告知したもうたか。それは『自分から語るのではなく、既に御言葉によって伝えられたところを使徒たちの心に示唆し、また教える』霊である(ヨハネ 16・13)。したがって、我々に約束された聖霊の働きは、新奇な、聞いたこともない啓示を製造したり、あるいは我々を一たび受けた福音の教理から遠ざけるための新種の教理を捏造することではなく、福音によって勧められている教理を我々の精神に印銘することにあるのである。」(綱要) 1-9-1

「神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばされるからです。いったい、人の心のことは、そ

の人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにだれも知りません。ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜ったものを、私たちが知るためです。」 ㊦

コリント人への手紙 第一 2・10-12

「これは、わたしが彼らと結ぶ契約であると

主は言われる。

あなたの上にあるわたしの霊

あなたの口においたわたしの言葉は

あなたの口からも、あなたの子孫の口からも

あなたの子孫の子孫の口からも

今も、そしてとこしえに

離れることはない、主は言われる。」 ㊧

イザヤ書 59・21

※この証拠聖句のカルヴァンの解釈はこうである。

「使徒たちや初代教会の信者たちのうち、誰一人として、神の言葉を侮ることを御霊から学ぶ者はなく、かえって一人一人はいよいよ深くこれを尊敬するように教えられたのである。このことは彼らの書いたものが最も明瞭に証するところである。更に、イザヤの口を通して次のような説教が為された。曰く『あなたの内にあるわが霊、あなたの口に置いたわが言葉は、今からのち永遠に、あなたの口からも、あなたの子孫の口からも離れることはない』(イザヤ 59・21)。イザヤはこう宣言した時、旧約時代の人々を、初歩を学ぶ小児のように、外的な教え(人間の

説教)に繋ぎ止めようとしたのではなく、むしろキリストの御国にある真の全き幸いは神の御霊とともに神の御声によって治められる所にあると説いている。」(綱要) 1-9-1

※5-②では、聖書の権威の本当の根拠が、「御言葉により、御言葉とともに、私たちの心の中で証しなされる聖霊の内的御業」によることと、聖書の文体が特別なものであることとを告白している。

「教会の権威も人間理性も、聖書が神の言葉であるという最終的な確かさを与えることはできない、としたのは、カルヴァンである」(註解)。また、カルヴァンは、「聖書の誤ることのない真理性と神からの権威」(聖書の無謬性と神的権威)について次のように言う。

「それ故、『聖霊によって内的に教えられたものは聖書のうちに固く安らう。また、聖書は・・・それ自体によって信頼されることであるから、証明や理論付けのもとに置くべきものではなく、我々が持つべき確実さは御霊の証しによって得られる』ということは動かせないものとならねばならない。すなわち、聖書はそれ自身の尊厳によって十分に尊ばれるものであるが、それが聖霊によって我々の心に証印されるまでは、我々に厳粛な感銘を与えることはないからである。したがって、我々は御霊の力に照らされて聖書は神からのものであると信じ、我々の判断や他人の判断によらず、人間の判断を超えて、これは(ちょうど神御自身の神々しさがここにおいて我々に見られるかのように)神御自身の口から人間の務め[説教職]を通じて我々に注がれて来たものである、といよいよ固く心に決めるのである。我々は自分たちの判断がよってたつべき論拠や、本当らしく見えるものを求めず、評価を絶したものに對するに相応しく、己が判断と、己が才能をそれに従わせるのであ

る。・・・我々は打ち勝ち得ない真理を捉えているという、はっきりした自覚を持つからである。・・・疑う余地なき神々しい力がそこから迫って来、またそこに息吹いていることを感じるので、意識的かつ自発的に服従へと向けさせられ、また引き寄せられるのである」(綱要)1-7-5。「聖霊は聖書の中に示されたご自身の真理と固く結びついておられるので、御言葉が相応しい尊厳と威厳を帰せられる場合にこそ、その力を示したもうということである。・・・主はご自身の御言葉と御霊の確かさを相互に結び合わせ、密着させたもうたからである。そういうわけで、御言葉への全き恐れと敬いが我々の魂に根を下ろすのは、御霊が我々に働きかけて、神の御顔をまともに直視させる時であり、またその逆に、何ら幻覚に惑わされる恐れなしに御霊を受け入れるのは、御霊をその御姿たる御言葉において知るときである」(綱要)1-9-3。

聖書の無謬性と権威性について述べている部分を、(解説)と(講解)から引用する。

「聖書が神の言葉であるということは、漠然とした感情ではなく、明白な無謬的真理だという確信であり、聖書の権威はこうした聖書の無謬性を根底に持つ主張なのである。無謬だからこそ権威があるのである。聖書が御言葉を通してわたしたちに証しすることは、この無謬性に基づく権威性そのものである。このことによって、聖書が単に啓示の記録だけにとどまらず、現在与えられている唯一の啓示そのものである。

ここでは明瞭に、アナバプテスト的神秘主義、すなわち、み言葉を離れて聖書が語るという教説と、ルター派的なみ言葉以外に聖霊の活動を否定する考えに対して、改革派教会の『み言葉と聖霊の共働』の教えが告白されている。」(解説)

「聖書に無謬性と神的権威性を賦与するものは、聖霊の靈感です。この無

謬性と権威性の確信を、わたしたちの心の中にしっかりと打ち立ててくださるのは、わたしたちの心の中に働く同じ聖霊の内なる証言です。この聖霊の靈感と聖霊の内なる証言こそ改革派聖書論を成り立たせる車の両輪です。」

(講解)

次に、聖書の文体について、カルヴァンがどのように言っているかを見てみよう。カルヴァンは、聖書の文体が天国の奥義を語るにふさわしい文体を持っており、また旧約の預言者たちを例に引きながら、その言葉に御霊の厳かさがいたるところに現れているとして次のように言う。

「我々が一たび聖書を他の一般の書物と異なって、恭しくその尊厳に適った仕方で受け入れるならば、先には到底我々の心に確かさを植えつけることも刻み付けることもできなかつたものが、最も適切な支えとなる。なぜなら、聖書のうちに神の知恵の配置がいかに秩序正しくまた整然と表されているか、更にこの教理がいかに天上的なものであって、地上的な何物をも匂わせておらず、いかに見事に全ての部分が相互に調和しているかを考え、これらの書に尊厳を持たせる事柄に深く心を傾けて熟考してみるならば、どんなに確信が強められるかは驚くべきものがあるからである。更になお、我々自身文章の優雅さよりも内容の厳かさによって聖書に捉えられ感嘆せずにはおられなくされることを考えれば、我々の心はいっそう確信を強められるのである。実際、天国の気高い奥義が、大部分において人から卑しめられるような身を低くした言葉遣いによって伝えられているということは、神の特別な摂理なしには起こらなかつたのである。これがもしも素晴らしい美辞麗句で述べられていたならば、不敬虔な者は、聖書の力はただその文体にあると皮肉ったかもしれない。ところが、聖書の飾り気ない荒削りとも言えるほどの単純さが、世のいかなる修辞家の文章もなし得ないほどに我々を感動させ、聖書に

対する尊敬を起こさせるのであるから、聖書には言葉の技巧を必要とせぬ、もっと強力な真理の力があると断定して差し支えないのではなかろうか」(綱要) 1-8-1。「私はまた、ある預言者たちが言語表現において著しく典雅であり、優美であり、いな絢爛たるものでさえあって、世俗の文章家も彼らの能弁を凌ぐことができないのを認める。聖霊はこのような例証を挙げることによって、聖書には一方において荒削りの粗野な文体が用いられていながら、雄弁の点でも決して欠けていないことを示したもう。更に、ダビデやイザヤやそれに類する人々のものを読むと、心地よき快適な弁舌が流れており、牧羊者であったアモスや、エレミヤや、ゼカリヤを読むと、彼らにおいてはごつごつした純朴な言葉が味わわれ、私の言った御霊の厳かさが至る所に現れている。・・・・聖書に関しては、騒々しい人たちが噛みつこうとどんなに躍起になっても、人間の理解力をもっては捉えることのできない文章が満ちている。」(綱要) 1-8-2